Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-12

志賀重昂『日本風景論』 : 地理学とナショナリズム

福井, 慎二

(Citation)
國文論叢,23:28-37

(Issue Date)
1995-04

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011800

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011800

志賀重昂『日本風景論』

――地理学とナショナリズム――

福井慎二

志賀重昂の『日本風景論』は、明治二十七年十月に刊行されるとすぐに大好評を得た。小島烏水が「日本の山岳文学史上に、忘れることの出来ない一書冊」であり、この「風景論が出てから、従来の近江八景式や、日本三景式の如き、古典的風景美は、殆ど一蹴された観がある[1]」と述べて以来、新しい風景観を提示したものとして評価されている。しかし風景観の新しさや風景美を表現した詩歌のアンソロジーとしての魅力が好評を生んだにせよ、『日本風景論』の持つナショナリズム性を無視して風景観の新しさのみを評価することは出来ない。なぜなら風景観の新しさは、ナショナリズムと不可分の関係にあるからだ。志賀のナショナリズムの持つ偏狭で排他的な差別性を批判することはたやすいであろう。しかし地学的・地理学的知識に基づき知的関心がなければ読みにくい『日本風景論』が、明治の読者に大いに迎えられる〈文学〉となっていることは評価しなくてはならない。本稿では風景観とナショナリズムとの関係、そしてその論法に注目しながら『日本風景論』が如何に〈文学〉たり得ているかを考察してみる。

一、戦略としての地理学

『日本風景論』が専門知識に基づきながらも幅広く迎え入れられたのは、そもそも受容する下地としての地理学と、それをめぐる時代状況が存在していたからでもあった。当時の地理学の状況を概観することで『日本風景論』の位置が見えてくるはずだ。石田龍次郎によると「幕末においては知識人としての侍は、教養として、また阿片戦争後は一国一藩の外交政治の要具として、外国の地理および歴史は知らねばならなかった。また庶民にとっては福沢諭吉の世界国尽し（明治2年刊）をはじめとする一連の往来もの形式の著作が、文明開化の世界知識普及に利用された[2]」という。そして地理は教育科目として重視され、「文部省・師範学校は早くから教科書用として、日本地誌略・世界地誌略などの大著を刊行したのをはじめ、ペスタロチの思想から身辺の土地、郷土の学習という意味で、各府県では公私の管内地誌（府県ごとの地理書）の出版が流行した[3]」という。教育以外の方面では、志賀自身名誉会員となっていた東京地学協会が地学調査探検のパトロン

の役割を果たしていた。中でも「海軍大尉郡司成忠に千島群島占守島における気候、潮流、北光、地理、特産等、地学上に関する報告を依頼[4]」したことが、特に社会的関心を集めた。三宅雪嶺は次のように記している。

今春（明治26年　引用者註）元勲内閣に対する民党の突撃が一世の注目する所となり、大詔渙発にて落着し、「袞龍の袖」の語出でたるが、之と全く質を異にし、而して之に劣らざる興味を促せるは、福島中佐（中略）の単騎西比利横断にして、報告の来るを待ち兼ね、時として消息の絶え、心痛して措かず、到来の時期の近づく程、愈々注意の熾度を高む。然るに福島中佐の帰朝して陸軍に気を吐くに先んじ、郡司大尉が短艇にて千島の北端に赴き、海軍に気を吐くとの報道の伝はり、世間は頓に二壮挙に熱狂す。

海軍大尉の送別に陸軍の長老谷子が出で、陸軍中佐の歓迎に海軍の長老川村伯が総代となれること、面白き取合せなり。政治の事は特殊の部分が注意を払ふとし、世間一般に多く然らず、郡司大尉の北航、福島中佐の単騎横断は、階級を問はず、我が心を得たるかに考ふ[5]

福島中佐・郡司大尉に先駆けて、志賀自身も明治十九年練習艦筑波に便乗して、十ヵ月にわたってカロリン・フィジー・サモア諸島・オーストラリアに巡航し、その見聞を『南洋時事』（明治20年刊）に著して好評を博したことは、見落とすわけにはいかない。これ以後南洋は南北アメリカと並ぶ移民先として調査され始めたが、他方北方に関してはロシアとの国境問題のため早い時期から注目され、郡司大尉の探検もその一環としてあった。また福島中佐の単騎シベリア横断は、シベリア鉄道完成とともにロシアの極東侵略の本格化が予想される中での情報収集が目的であったという。[6] このように地理学は身近な所では郷土愛を育む教育科目として、また国家レベルでは軍事的・政治的戦略を練る上での基盤を与えていたと言えよう。

以上のように概観してみると、『日本風景論』は地理学によって郷土愛をナショナリズムに作り変え再編する位置にあったと考えられる。前田愛によれば、『日本風景論』は「民衆の生活感覚や郷土感情としてのパトリオティズムと結びついていた風景美を、日本全土を包含する広大な空間のもとに統一的に把握」しようとしていたというが、むしろ郷土愛をナショナリズムに積極的に変容させようとしていたと言うべきだろう。『日本風景論』がいかに郷土愛をナショナリズムに変容させたかを見る前に同時期地理学を方法として思想展開した内村鑑三という愛国者の『地理学考』（明治27年5月）を先ず見てみよう。[7]

内村は刊行と同時に大好評を得た『日本風景論』に批判的であった。志賀が日本なる「此東洋の彩花島内に於て世界の凡ての美なるものを見」「浩々たる造化其の大工の極を吾が日本に鍾む」とするは「是れ Patriotic Bias（愛国偏）なり」（『六合雑誌』明治27年12月）と内村は批判する。しかし志賀は、『日本風景論』の冒頭を「『江山洵美是吾郷』（大槻磐渓）と、身世誰れか吾郷の洵美を謂はざる者ある」との自覚で始めつつも、さらに「然れども日本人が吾が江山の洵美を謂ふは、何ぞ啻に其の吾郷に在るを以てならんや、実に絶対上、吾が江山の洵美なるもの在るを以てのみ」と日本の風景美の絶対性を説く以上、内村の批判の矢は志

賀の確信の根幹を射抜き、揺るがすことは出来ない。なぜなら志賀自身が「Patriotic Bias」に陥りがちなことを自覚して批判を巧妙にかわしていることに加えて、「ダーヂルンよりエベレスト山を望むの観、即ち偉大なる美、是れ日本風景の欠乏ならずや、我国の風景は人を酔はしむるものなり（細工に過ぎて）、人を高むるの美（中略）は吾人は汎く之を万国に求めざるべからず」（同）という内村の相対化の論法では、志賀の〈科学〉に基づく絶対の確信を突き崩せないからだ。このように志賀を批判しているが、『日清戦争の義』（『国民之友』明治27年9月）を発表して清との戦争を正当化している以上、内村にも愛国心があったと言えよう。むろん志賀の愛国心とは質を異にする。

『地理学考』の中で内村は「愛国とは国自慢にあらず。」「真正の愛国心とは宇宙の為めに国を愛するを言ふ」と述べている。それ故にこそ「山に芙蓉あり、其秀、瑞のブランク、メターホーンに及ばずと雖も、其姿の優と正とは衆峰の儔ひすべきなし」[8]と言うことが出来、『日本風景論』批判の根拠と愛国心の質の相違が明らかとなる。内村が『地理学考』で説こうとしていることは、「日本国の位置は米亜の間にあり、其天職は、是等両大陸を太平洋上に於て連鎖するにあらずして何ぞや」ということに尽き、その説き方は次のような論法に基づく。

イベリヤ半島は、我の山陰山陽なり、彼の温暖なる伊太利半島の橄欖樹を以て掩はるゝは、我の南海の紀伊半島の蜜柑樹を以て馥郁たるが如し。アドリヤ海を伊勢海とせよ、而して尚ほ想像力の自由を許すならば衣ヶ浦以東伊東半島迄をバルカン半島と思ひ見よ[9]

まさに非科学的記述であり、この「想像力」の方法の積み重ねによって「日本国の位置は亜細亜的なれども其構造は欧羅巴的なり」との結論が得られる。そしてブーエー（M. Bouet）なるものの法則を援用して「我に亜欧両主義を同化するの特質あり」として持論の日本の天職を正当化している。これに対して志賀の場合『地理学講義』（明治22年）は概説ながらも客観的・科学的である。さらに『日本風景論』ではその科学的知識によって充分な説得力を与えられ、「欧米列国の淵源果然火山岩国に在り、吾が日本亦火山国の天職として東洋将来文明の淵源たらざるべからず」と内村とは全く対照的な発想で日本の天職を主張している。

ここで問題となるのは、その〈科学性〉ではない。当時の専門地理学者から志賀の〈科学性〉が全面的に評価されたわけではなく、今日の目からはその〈科学性〉において志賀と内村は相対的にすぎないとも言えよう。要するに問題は、対照的な発想をとる二著のうち内村の『地理学考』が『地人論』と改題されて再版されたのが明治三十年であったのに対し、志賀の『日本風景論』は初版刊行二ヵ月後の二十七年十二月には早くも増訂再版され、しかも翌二十八年中には三度版を重ね、増訂五版にまで至っているという受容の差異である。このような相違はどこから生じるのか。一つには小島烏水が既に述べていたように「理を尽くした欧文素と、簡潔勁抜な漢文脈が、よく融和してゐる、しかも嫋々ともいふべき余韻が、漂つてゐる[10]」『日本風景論』の文体の魅力によるのかもしれない。「巻中驚くに堪へたるハ数多の詩を挿んたること是れなり此一点よりすれハ題号を改めて南洋新詩と云ふも盍し不可なかるへし」（『国民之友』[11]）と評された『南洋時事』以来、

各学校で教科書として採用された『地理学講義』の増訂六版（明治27年6月）が「乾燥無味なる地理を氏が詩学的の思想を以て叙述したるもの」（東京日々新聞）[12]と評されるまで、志賀の文体評価は定まりつつあったと言えよう。しかしこういった評価と対立する見方もある。高山樗牛は『現代文章私見』（明治34年）の中で、志賀の文章を三宅雪嶺・徳富蘇峰と比較して次のように述べている。「『日本風景論』は、慥に彼が独得の著書、着想の奇警なる者無きにしも非ざれども、素より蘇峰、雪嶺の文字と並び称せらるべき価値あるものに非ず。而して近年読売紙上に間々掲ぐる所の地理紀行の文章の如きは、文情文品更に下落せるを見る。概して言ふ時は、矧川の文、理徹せず、情迫らず、瀟洒は則ち是れあるも、大抵散漫の詆りを免れず[13]」と。樗牛は他の政教社同人も取り上げて長所・短所を指摘しているが、明らかに否定的な評価を下しているのは志賀の場合だけである。こういったことに加えて、「詩学的の思想を以て叙述した」と評される『地理学講義』はその評に値しないことからすれば、志賀の文体に関する一つの神話が生まれていたのだと言えるのかもしれない。このような神話の有無にかかわらず注目しなければならないのは、やはり新しい風景観を志賀が提示したこととその提示の仕方である。ここにこそ郷土愛をナショナリズムに変容させるメカニズムが存在するとともに、読者の熱烈な歓迎を生んだ秘密があるのにほかならない。

二、風景観の〈革命〉

志賀が風景観の〈革命〉を意図していたことは、「日本風景論」と題された初出（明治26年12月『亜細亜』）に明らかだ。

余輩は本篇に立説するに、宜く従来の夭桃白李、嫩緑軟紅、何々の三景、何々の八景に寄託する所の心懐を、転一転して水蒸気、火山、流水の侵蝕に移さんことを以てし、旧套の「名所廻ぐり」一流なる思想の革命を促せり（傍点　引用者）

このいわば革命宣言とも言うべき一文から、二つの点にわたって〈革命〉を志向していることが明らかとなる。一つ目は既に小島烏水が指摘しているように、『日本風景論』によって「従来の近江八景式や、日本三景式の如き、古典的風景美は一蹴された」ということである。内藤湖南によれば、中国で言うところの「瀟湘八景は洞庭附近のありふれた景色の中に景趣を求めようといふ考えであるが、近江八景は限られた場所に特別な景色を求めようとする考へで[14]」あるという。名所案内たることをやめた風景観については、『日本風景論』初版には存在しないが後にその緒論に挿入されることになる、日本の風景の特徴をまとめた「瀟洒、美、跌宕『日本風景論』補遺」（『日本人』明治27年12月）に具体例が示されているので、見てみよう。

一、瀟　洒

夜雪初めて霽れ、分明に認めえたり屯田村（北海道）の燈火三、四点

二、美

桜島（薩摩）の円錐的火山、籬落其の腰脚を環ぐり、緑竹之れを囲み、其の間柑、柚、臭橙、金橘、朱欒の枝条相雑接し、煙草の畦圃高低参差す。

三、跌宕

最上川の上流、飛泉畳湍、一瞬十里、毛髪為めに竪立す。

このように日本全国にわたって具体例がとられ、近江八景式の風景観とは確かに異なる。前田愛は次のように述べている。「日本三景が伝統的な風景感覚の〈中心〉をかたちづくっていたとすれば、志賀の『日本風景論』は、〈辺境〉の空間を強引にくりこむことで、ナショナリティに根ざした風景論を建立する試み[15]」であると。伝統的風景観の側から見れば〈中心〉〈辺境〉といった対立が存在するが、志賀自身の発想からすればそういった対立自体無化され、志賀の意識に据えられているのがそれらの対立とは無縁の〈日本〉という観念自体であったことは言うまでもない。日露戦争の従軍記録『大役小志』（明治44年）で使われる「君国」という言葉の中に、妻子・郷土といった具体的なイメージが欠如しているのはその表れとも言える。『日本風景論』初版でおそらく読者の目をひいたのは、日本全国の火山の一覧であったと考えられる。志賀の意図は日本の火山の多さの誇示であり、読者は容易に了解出来たはずである。そういった誇示という点からすれば、この一覧自体は通読を前提としてはいない。言い換えれば読者は各自の故郷の山々を選んで読んだはずであり、その点で郷土愛を助長したと言えよう。そうしたことを意識してか志賀は初版刊行後日本の風景の特徴を瀟洒・美・跌宕とまとめ、その日本の美しさが全国各地で分有されていることを地名入りで具体例を今引用したように示しているのだ。このことと『日本風景論』所収の「日本の生物に関する品題」「日本の水蒸気に関する画題」では必ずしも地名を記さず、そういった地名に関わらない日本の特徴的な風景美が列挙されているのは、意図上表裏一体であるはずだ。瀟洒・美・跌宕といった特徴の指摘の初出は『日本風景論』増訂再版と同月に出ており、合理的にはこの再版に取り込まれたと考えるべきだろう。郷土愛をナショナリズムに再編する上でこういった操作は必然的であった。

さて志賀が「日本の生物に関する品題」「日本の水蒸気に関する画題」で列挙する特徴的な日本の風景は、むしろ伝統的な美意識に概ね基づいていると言えよう。しかし最大の相違点は、志賀が「日本の景物をして洵美ならしめたる主源因」と評して火山岩・火山を重視していることである。これが二つ目の風景観の〈革命〉である。大阪朝日新聞の書評では「火山岩を系統的に連繋して各々一首の古歌を系げたるが若きは、斯人に非ずんば断じて此の想ひ付あることを得ざる者、叙論中も亦人の意表に出る者少なからず」（明治27年11月16日）と驚いている程の特異な試みであった。

なぜ火山なのか。三田博雄氏によれば「『日本風景論』は、志賀の著作の中でもきわめて特異な発想から出来上がっているところから、その発想を借りてきた原型のようなものがあったと推定される。（中略）そのモデルとして想定される本の一つは、ジョン・ラバックの『自然美とわれわれの棲む世界の驚異[16]』」であるという。そのラバックによれば「地球上の火山は事実上数へつくせない[17]」というが、『日本風景論』では「欧米列国の如き皆な火山なきも、吾が日本独り是れ在り」と、地理学的に日本の大きな特徴と見做されることになる。風景観は美意識の表れでもある。ラバックが「自然界に於いて火山の噴火に勝る壮観は見られま

い[18]」と述べるまでもないことだが、実のところ志賀は噴火自体には美を見い出しているわけではないのだ。それは「日本には火山岩の多々なる事」の「玄武岩」の項目の火山をめぐる主客問答に表れている。客が「火山力爆裂の多炎残酷」なる危険・災害への危惧を述べるのに対し、志賀は火山がなければ「太地に凸凹なく起伏なく、渾円球上一面に平然、克く一奇、一美、一壮観を認めず」「唯だ此の火山力の在るあり、以て克く渾円球上に奇を添へ美を装ひ壮観を呈出す」と火山の風景形成力を高く評価し、噴火の美を問題にしてはいない。この人間という視点を欠く志賀の答えには満足しなかった客はさらに「火山力有形上の功蹟、我れ謹みて命を聴く、独り其の無形上なる悪感化を如何」「火山時々爆裂、人々為めに悸々、居常寧所なきが如く、其の結果不知不識の間に恒心定念の発達を残賊する若干ぞ」と、人間に与える噴火の害悪をあくまでも問う。例えば明治の代表的火山爆発には、四百六十一人の死者を出した明治二十一年の磐梯山、また実地調査に赴いた農商務省技師と帝国大学学生が殉職した二十六年の吾妻山があった。これに対して志賀はヨーロッパで火山岩の上に建国されたものとしてローマをあげ、ダンテ、ガリレオといった文化人、シーザー、ガリバルディなどの政治家を輩出したことをもって反論している。しかし他のヨーロッパ諸国に偉人は存在しなかっただろうか。さらに蛇足にも火山力によって「山嶽高崇なるを以て、其の側面積自から広大に、実際上、日本国の面積を加倍」するなどと述べる時、火山・火山岩重視の風景観がいかに特異なものであったかを志賀自身充分自覚し、読者を納得させるのにどれほど苦心しているかがわかるはずだ。読者に何を理解させるかよりも、むしろ如何に理解させるかその論法にこそ志賀の関心が集まっていたと言うべきだろう。

以上のように志賀が火山を重視するのは、火山の分布とその風景形成力に基づく合理的なものであった。しかしその火山重視の風景観が特異なことを自覚しつつもなお固執するのは、志賀の美意識・感性によるのであろうか。ここで火山岩について見てみよう。

月光、矢矧（参河）の花崗岩渓谷を照らして其の千軍万馬の古戦場に映じ、（中略）湊川（摂津）両岸の花崗岩沙に反射し鳴呼忠臣墓台の花崗岩に反射するに倒りては其の蹄厲跌宕なる真に言ふべからず

岩石の結晶が月光できらめく美しいイメージが読み取れるが、岩石・結晶に対する志賀の嗜好が表われているわけではないようだ。それは時代とジャンルを異にするが、あえて宮沢賢治の作品と比較してみれば明らかとなろう。

やがて太陽は落ち、黄水晶の薄明穹も沈み、星が光りそめ、空は青黝い淵になりました。（中略）その黄金いろのまひるについで、藍晶石のさはやかな夜が参りました。（中略）夜があけました。日光は今朝はかゞやく琥珀の波です。

（「まなづるとダァリヤ」）

「それぞれの岩石の、結晶の形や性質を正確に把握して見事に使い分けた[19]」宮沢に比べて、志賀の場合岩石や結晶といった物質それ自体に基づく想像力を展開しているのではない。花崗岩は楠木正成という存在によって美しく輝くのであり、物質の美はまさに精神美に転化させられているのである。『地理学講義』増訂十四

版（明治40年4月）でも参河の花崗岩はきらめく物質的イメージで描かれてはいるが、一転して次のような経済的発想が混入する。

今後建築物に、道路の修築に（中略）其の事業全国に隆起するに当り、且つ相模石、伊豆石の如き安山岩質、凝灰岩質が湿気の深き日本国には遂に建築石材となすに足らざるを知了する日に到らば、参河の石材は多大の販路を発見せん。唯だ今日に当りて最も考究すべきは運搬賃にあり[20]

物質にすぎない風景に精神美を読み取る志賀の視線には、『南洋時事』以来細かな実践的な経済上のアイディアに満ちた奇妙な合理性が同居していた。

さて火山岩のきらめくイメージをたどっていくと、『日本風景論』での志賀の発想の根拠が露呈することとなる。

黄塵紛々、戸障に入り、木葉を蔽ひ、田園に累り、泉水亦た黄濁、殺風景の極を尽くす、是れシナ詩人の動もすれば「黄塵万丈」の語をなす所因、敢て日本の如き火山岩国の浄山澄水の間に使用すべからざるの語

火山岩の少ない朝鮮や「平々たる水成岩延縁すること無慮四万二千方里（中略）、所謂『黄土』」に覆われる中国の風景と、火山によって起伏に富む日本の風景とは、平面的／立体的、黄濁／清澄といった対比が徹底してなされている。志賀の火山重視もこういった対比の上でこそ成り立っていたのにすぎない。この対比に対して内村鑑三でさえ「目下吾人の讐敵なる支那本土に対する彼の敵愾心の如何に激烈なるよ」（前出）と評せずにはおれなかった程のものである。この「敵愾心」は連戦連勝に湧く二十七年十月『日本風景論』初版刊行時に出現したのではなく、開戦に先駆けること八ヵ月前の二十六年十二月の初出から存在し、極めて煽動的・政治的なものであったことは明らかだ。

三、ナショナリズムと国粋保存旨義

志賀は単に敵国清を貶め、風景美を通じて日本の優秀性を説くだけにとどまらず、欧米列強との比較によって日本の絶対的優位を確認しようとしていた。その論法は例えばラバックがイギリスという「一活火山だに在るなき処に於てすら猶ほ且つ『全世界中の多様多変なる風景を呈出す』と艶説す、何ぞ況んや吾が日本を、浩々たる造化が其の大工の極を日本に鍾めたりと断定する、愈〻益〻僭越にあらざるを確信す」という〝ましてなおさら〟の論理に基づく。このようにいかに日本の風景の絶対的美しさを絶叫して説き、ナショナリズム高揚を一途に目指そうとも一方的で平板なものとなるだけであり、必ずしも説得力を持つとは限らない。そこで浮かび上がってくるのは、『日本風景論』が単なるナショナリズム高揚の書であるにとどまらず、〈警世〉の書としての側面だ。それは次の二つの点から明らかだ。

一つ目は洞窟や奇岩などの「火山力の痛奇なる産物、日本に多在する此の如し、其の多在するは火山国の火山国たる所、而かも之れを知らず之れを認めず、却て英国に在る如き少許の火山産物を羨む、是れ抑〻何等の事ぞ、真個に吾が火山岩の為めに其の知己少きを惜む」と述べて、西洋崇拝一辺倒の風潮を嘆いていることがあげられよう。日本の洞窟・奇岩などが数多く列挙されれば程、志賀の嘆きは単なる悲嘆にとどまらず、明確な社会批判に転化するはずだ。二つ目は日本人の「性情」批判である。志

賀は日本人の愛好する桜は「日本人が性情の標準」となすべきではないとし、代わりに「松」を重視している。いささか意表をつき志賀の独特な発想とも思われそうだが、「白砂青松」という語からすれば必ずしも従来の美意識に反するわけではないだろう。このように重視する理由は、桜の没自主性に対して松の「豪健硬勁」（増訂十五版　明治36年6月）なる自主独立性こそ日本人のあるべき姿であり、事実この松によってスイスなども感化されて独立を保ってきたからであるという。

しかし志賀が、元寇の際わずか「八十余騎」で「三万余人」の敵に反撃した右馬允七郎宗助国の精神のありようを松の性情と重ね合わせて、「日本は『松国』なるべし、『桜花国』と相待たざるべからず」と述べる時、「読下して意気自ら昂然たらしむるものあり」（『女学雑誌』明治27年12月）との評が起こる。このように日本人の欠点を指摘する〈警世〉的側面が、愛国心高揚につながってしまっている。日本人の欠点の指摘が決して苦言とはならず、むしろ「特に日本は松柏科植物に富むこと実に全世界中第一」という一句をあえて差し挿むことで日本の興隆が予言され、〈警世〉的側面は単なる技法に堕落してしまっている。つまり〈警世〉的側面も火山重視の特異な風景観を読者に納得させるための論理同様に、郷土愛をナショナリズムに変容させる『日本風景論』の論法の一つであったと言ってよいのである。

ところで『日本風景論』のナショナリズムは、志賀が年来唱えてきた「国粋保存旨義」とはいささか異なるように思われる。志賀の言うところの「国粋」とはどのようなものか、先ずは確かめておかなければならない。

国粋なる者ハ、日本国土に存在する万般なる圍外物の感化と、化学的反応とに適応順従し、以て胚胎し成長し発達したるものにして、且つや大和民族の間に千古万古より遺伝し来り化醇し来り、終に当代に到るまで保存しけるもの

（『日本人』が懐抱する處の旨義を告白す」明治21年）

この引用では「適応」「遺伝」といった生物学用語が用いられてはいるが、自然環境と人間・社会・歴史とを関連づける地人相関論といった地理学的発想に置き換えても志賀の言わんとしていることにおいて変わりはない。即ち国粋とは日本の「固有ノ長所」（山田美妙『日本大辞書』明治26年刊）であるということである。志賀は日本の国粋がどのようなものであるか明示してはいない。そもそも国粋保存旨義自体、日本の国粋が何か問うことを必要としてはいなかったのだ。つまり「『国粋保存』の大旨義ハ即ち西洋の開化を日本に輸入するも之をして大権を操らしめす、日本の開化を主とし西洋の開化を客となす者にして、語を易へて謂へば西洋の開化を輸入するも之をして日本的に同化せしむるもの」（「日本前途の国是は『国粋保存旨義』に選定せざるべからず」明治21年）だからである。こういった主体性重視は保守性を持つわけではない。それは「余輩ハ徹頭徹尾日本固有の旧分子を保存し旧元素を維持せんと欲する者ニ非ず、只泰西の開化を輸入し来るも、日本国粋なる胃官を以て之を咀嚼し之を消化し、日本なる身体に同化せしめんとする者也」（同）ということで明らかだ。このように国粋を保存しようとするのは、国粋を西洋文明受容のための「胃官」、言い換えれば受容のための素地・前提と志賀は見做し、かなり合理的な理由に基づくと言えよう。

志賀の国粋保存旨義が開明的・合理的・理性的であったのに対し、「ナショナリズムは、実際性と同時にそれをこえる情念と大義とがないと魔力にならない。重昂のナショナリズムにはそれが弱かった」[21]という評価がある。確かに国粋として武士道・大和魂を名指しで取り上げず、さらには「所謂国学者流の口吻に倣ひ、漫りに神国、神州、天孫等の文字を陳列するものにあらず」（「『日本人』が懐抱する處の旨義を告白す」）と志賀が宣言しているように、国粋保存旨義には理性を盲目にする神秘性を欠いている。その点において国粋保存旨義とナショナリズムとは別物と言うべきだろう。しかし『日本風景論』では風景美の絶対性を説くことによって充分愛国心を高揚させ、「此書は洵に日本大勝利の裏面的説明者」（「金城新報」明治27年11月5日）であるという評価を生んでいる。こういったことからすれば日本の風景美の絶対性を説くに当たって数々の論法を駆使した時、極めて理性的であった国粋保存旨義は強力な魔力を持つナショナリズムに変質したのではないだろうか。『日本風景論』にもしも情念があるとすれば、それは説こうとした風景美の絶対性そのものの中にではなく、志賀の取った論法自体にあったと言えよう。その論法によって『日本風景論』の〈科学的〉な言語がそれ自体において煽情的になった時、志賀の〈文学〉が存在することになったのである。この論法や論理を含めて文体というものが考えられるとするならば、既に見た志賀の文体の神話の正体が明らかとなろう。

志賀の〈文学〉から〈科学〉や論理を取り去ってしまって残るものは、次のような感性であろう。

戦役の開頭に当り我が捕獲する所の露国汽船、名は満州丸、今や此の満州丸に中外の賓客を載せて満州に観戦せんとす、人をして早く既に詩中の感あらしむ。満州丸の舳頭、露字にて「マンチュリア」と刻せるもの、黒く抹し去り、金字にて邦語「満州丸」と大書す。此の露字を抹して邦語に代へ、而かも黒く抹されたる露字の面影朧気に残り、其上に邦語の金色頓に燦爛とし、国運の隆昌と映発するの概ある処、恍として大詩料なり。

（「満州丸雑筆」『大役小志』所収　傍点引用者）

こういった卑俗な感性は志賀の漢詩にどのようになって表れるだろうか。『大役小志』の中で乃木大将の子息二人の戦死を悼んで作った「兄弟行」を見てみよう。

征馬不前人不語。金州城外立斜陽。太郎聊了公家事。不負阿爺教義方。太郎洒血血未乾。浩然如帰斃次郎。太郎次郎逐鶺鴒。相逢応喜共国殤。惟望阿爺疾攬轡。澄清虜兵答　天皇。

『日本風景論』に論法の魔力があったのに比べると、ここで引用した詩には読者を「昂然」とさせ、己の磁場に引き込む魔力が欠けていると言えよう。そうなっている理由は日清戦争で見せていたような敵愾心の激烈さに欠けていたからではなく、むしろ『大役小志』自体敵愾心を煽ることとは別な所に主眼を置いていたからである。即ち文人を自称することで「重昂の主観では、武人ないし軍人と対の意味で、彼じしんの役割を明示[22]」することであった。「予や無用の文人、風通り好き室を供せられ、浴場を供せられ（中略）自から顧みて慚愧に堪へず、而かも何の為す所なし」（「旅順行日記」『大役小志』所収）しと卑下しても、先に見たような卑俗な感性に基づく〈文学〉ゆえにこそ戦場において文

学とは何か問う必要はなかったのだ。『南洋時事』に収められていた漢詩は野心の大きさに比して自らの無能を嘆き、遠い異郷での寂寥に堪える青春の吐露にほかならなかった。しかし『大役小志』の漢詩では個の面貌は失われ、文人を自覚することがむしろ表現行為を楽天的にしてしまっている。志賀の変貌と言えよう。この変貌は国粋保存旨義がナショナリズムへと変質したことと並行し、その論法の煽情性と、既に引用した卑俗な感性と結びつき物質に精神美を見い出す視力とを獲得した『日本風景論』を契機にしたものにほかならない。

注

(1) 『日本風景論』(岩波文庫　昭和12年)　解説三、六頁
(2) 『日本における近代地理学の成立』(大明堂　昭和59年)　二六九頁
(3) 注2　二七九頁
(4) 注2　一六〇頁
(5) 『同時代史第二巻』(岩波書店　昭和25年)　五〇六、五〇八～九頁
(6) 豊田穣『情報将校の先駆　福島安正』(講談社　平成5年)
(7) 『前田愛著作集第六巻』(筑摩書房　平成2年)　二四四頁
(8) 『内村鑑三全集2』(岩波書店　昭和55年)
(9) 注8
(10) 注1　一二頁
(11) 『南洋時事』増補第三版巻末所収
(12) 複製『日本風景論』初版付録(飯塚書店　昭和54年)
(13) 『樗牛全集第二巻』(博文館　明治40年)　八八七頁
(14) 『内藤湖南全集第九巻』(筑摩書房　昭和44年)　二六一頁
(15) 注7　二四四～五頁
(16) 『山の思想史』(岩波新書　昭和48年)　五八頁
(17) 板倉勝忠訳『自然美と其驚異』(岩波文庫　昭和8年)　一五二頁
(18) 注17に同じ
(19) 大塚常樹『宮沢賢治　心象の宇宙論』(朝文社　平成5年)　二一三頁
(20) 文武堂　一六八頁
(21) 亀井俊介『新版ナショナリズムの文学』(講談社学術文庫昭和63年)　一二八頁
(22) 『前田愛著作集第四巻』(筑摩書房　平成2年)　一三八頁

尚『日本風景論』のテクストは、基本的には初版(『明治文学全集37政教社文学集』筑摩書房)に拠った。但し増訂十五版(岩波文庫)より引用する場合はその旨明記した。他に『志賀重昂全集』に基づく講談社学術文庫を参照した。また『南洋時事』・『大役小志』は『志賀重昂全集』第三・五巻に拠った。

(本学大学院博士課程)